

## 大草谷津田いきものの里 自然観察会

### でんでんむしむしカタツムリ…

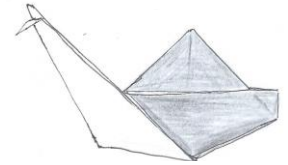
太田 慶子（千葉市）

日 時：2018年9月16日（日）10：30～12：00 天候：曇り

参加者：31名（大人16名、子ども15名）

担当指導員：太田慶子、藤田英忠（参加指導員：岡田、木下、萩）

子どもへのお土産  
の折り紙カタツムリ↓



例年6月半ばに行っていたカタツムリの観察会を、今年度は秋雨前線が南下する頃を狙って行った。折から前日が雨となり、カタツムリもきっと姿を見せてくれるだろうと期待して、朝下見をしたのだが、なかなか見つけられず。けれど参加者のたくさんの眼があれば見つかるのではない、カタツムリについて見てもらいつつ、いろいろなパフォーマンスをしてみた。

カタツムリの通称ツノだが、長い方は先に光を感じる程度の目がついており、短い下の方で匂いを感じる。口は下の方であって、木についた苔などを削って食べる。また、呼吸を殻の近くにある肺孔を開けたり閉じたりして行う。大きなカタツムリなら穴の開閉がよく見えるので、実際に見てもらおうと、「へえ～」という声上がる。（その穴の近くから糞も出す）陸生の貝であるカタツムリは肺呼吸をしているので、コップに水を入れてその中に入れると這い上がろうとする。つまり、雨は好きだけど、水の中では暮らせないということ。また、カタツムリを活け花に使う剣山の上に置いても平気だし（針の山地獄に落ちても平気！？）、ナイフの上に置いてもちゃんと前に進む。「これって、すごいよね！」（カタツムリの腹足には粘液があり、へばりついて包み込むようにして移動するからだけど、子ども達には理屈は二の次だ）。「カタツムリの雄雌の区別は？」という質問があり、「カタツムリは雌雄同体です。たぶん動きがゆっくりなので、相手を見つけたらすぐに交尾できるよう、雌雄両方の生殖器を持っているのでしょう」と答える。

3日ほど前に捕まえておいたカタツムリを、ケースにまずボール紙を器に敷いてから、餌になる野菜（人参やナスなど）を入れて、霧吹きで湿らせておくと（普通の虫かごは密閉性がなく乾燥しやすいので、適度な湿度を保つ必要がある）、明らかにボール紙を食べた痕と、白っぽい糞がたくさんあることがわかる。カタツムリにとって、カルシウムでできた殻は身を守るための大切な“家”であり、ボール紙（名刺やはがきなどにも）には紙を平らにするためなどにカルシウムが含まれたカオリンが使われている。ここでも、「へえ～」という声が…。人参をやると糞はオレンジ色になる。

さて、実際に道を歩いてカタツムリ探しを始めたが、最初なかなか見つけることができなかったが、一番ふつうにいるミスジマイマイ、5cm近くある大きなヒダリマキマイマイ、そして数の少ないニッポンマイマイも見つけてくれた。みんなで20匹近くも！なぜか、あまり小さなのがいなかった。カタツムリの仲間のキセルガイには「こんな小さな貝がいたのは驚きでした」という声も。できれば、蓋のある陸生のヤマタニシを見つけたかったが、見つからず。田んぼにいるオオタニシを取って、カタツムリには蓋はないけれど、タニシには蓋があることを見てもらった。



腹足も大触角も長いニッポンマイマイ  
（実物大）